



# 私の平和論



小城ゆり子著

私は太平洋戦争体験者の最後の世代である。昭和18年に生まれ、20年に空襲にあった。そんな赤子のときのことなど、おぼえているはずがない、と言う人もいるが、記憶になくても、身体に刻み込まれた体験はある。言葉にできない、混沌とした体験。それを、後に大人たちの話から、言語化した。

1才7ヵ月で、死の淵をくぐる……母親が、空襲の中を私を背負って逃げてくれた。浦和市（現在、さいたま市浦和区）で空襲にあい、父親の郷里、新潟に逃げる。

「新潟には、原爆が落とされるはずだったんだよ」と、後に、母親が言った。

亡くなった母親の話によると、8月14日、「明日、新型爆弾が落とされる！」と市内の人たちが郊外に住んでいた母たちのところに逃げてきたという。その翌日、戦争は終わった。実際に新潟に原爆を落とす計画はあったようだ。きっと、アメリカ軍は、空から原爆投下予告のピラを撒いたのだろう。で、人々は知ったようだ。

赤子は何も知らなかつたろう。が、辺りの雰囲気はわかる。

戦争が終わってから、小学校のサイレンになると、私は泣き出して母の背にしがみつき、「逃げよう、逃げよう」とせがんだという。大人たちがいくら、「戦争はもう終わったんだよ。もう空襲はないんだよ」と言っても、私は泣きやまなかつたという。

戦争は原体験としてあった。PTSD（心的外傷後ストレス障害）にかかっていたのかもしれない。その後、PTSDは解決したが、心に受けた傷は残った。

人々は戦争の悲惨さを訴えた。太平洋戦争後、東西冷戦の中で、日本人は平和を希求した。

戦争の悲惨さを語ってくれた大人たち……今、60年以上たつて、その大人たちは、もうほとんどいない。かろうじて生きているのは、終戦のとき子供だった人たちだけである。実際に戦争を戦った人たちは、もうほとんどいない。

そうして、日本人は、戦争の悲惨さを忘れた。

60年安保闘争の後、同い年の友だちが言った。「ほら、戦争なんてないじゃないか。安保、安保って、安保があつても、戦争にはならないじゃないか」確かに日米安保条約があつても、日本は戦争に参加しなかつた。それはなぜか？

それは、日本人が、戦争に反対してきたからだ。安保闘争を闘つたからだ。

東西冷戦が、長く続いた。アメリカとソ連の核実験競争があつた。朝鮮戦争があり、ベトナム戦争があつた。ソ連が崩壊する日まで、冷戦は続いた。半世紀までの長い間。その間、キューバ危機など、実際に第三次世界大戦が起こつたかもしれない危機もあつた。それを避けられたのは、世界の人々の平和の願いがあつたからだろう。

冷戦は終わった。ソ連は、アメリカとの経済競争に勝てなかつた。

しかし、平和は来ただろうか？

世界の各地で、局地戦争が多発する。

アメリカは戦争をやめない。

そして、9・11があった。イスラム原理主義者たちは、アメリカの世界貿易センターを破壊した。多くの血が流された。

アメリカは復讐に立ち上がる。アフガニスタンの戦争、イラクの戦争。それらがようやく終わろうとして、今度はイラン、北朝鮮。

日本はどうしただろう？ 日本は、なんとイラク戦争に参戦したのだ。

国を守る、……周辺（極東）事態に備える……なんと遠く、中近東にまで行ったのだ。

「国際貢献」という便利な言葉があるから、世界中、どこへでも、出て行ける。60年近く戦争をしなかった国、日本が、アメリカの戦争にはせ参じる。これこそ、日米安保条約であろう。

戦争に苦しんだ大人たちが亡くなり、社会党流の絶対平和主義が色あせ、風化して、今ここにいるのは、自衛隊を認め、その海外派兵までを認める人々の群れである。まさに、戦後は終わったのだ。

新しい戦争では、アメリカ側が圧倒的に有利である。核兵器は使われないが、新しい兵器が開発され、なんと人間が闘わなくても済むロボット兵器までできたのだ。日本の自衛隊員は、戦争に行っても、昔のようには、大勢、戦死しないで済むだろう。

これまで世界各地に行っても、自衛隊員は、ほとんど戦死していない。それは、憲法第9条に守られて、実際の戦闘行為にはあまり参加していないせいもあるが、現代の戦争が勝利者側に犠牲がほとんど出ないしくみになっているからではないか。アメリカにはせ参じている日本の戦闘員たちは、負けることはないだろう。これからの戦争は、太平洋戦争とは違うのだ。日本人は、被害者にならず、加害者になるばかりなのだ。もちろん、加害者側も無償ではありえないが、本土にいる国民が、戦争の被害をもろに受けることはないかもしれない。

それでも、加害者になってよいのだろうか。加害者になったら、精神の荒廃はどんどん進むだろう。ベトナム帰りのアメリカ兵たちが、次々と精神を病むようになったように。ロボット兵器は人間を墮落させる。

私たちは、今一度反戦平和の原点に立ちかえらなければならないのではないか。

## (2)

---

(2)

私は、学生の頃、核実験反対運動をしていて、当たり前なのが当たり前として通らない現実を知った。

米ソがどんどん核実験をする……地球上に放射能がばら撒かれる。私たちの身体が侵される。だから、核実験に反対するのは人間として当然と思うのだ。これはみんなのことなんだから、みんなが反対するべきだと思った。自分の身体を自分で守らなくてどうするか。が、実際にはみんな、無関心だった。

街頭で署名を呼びかけても、多くの人は、知らん顔して通り過ぎる。自分の問題と思わない。

大学で平和問題の集会を企画しても、学生が集まってこない。関心のある人たちだけでも学習会をしようとしても、長続きしない。

今も放射能の雨が降っているのに、米ソの緊張も一触即発だというのに、みな、無関心でいられる。私はその気持がわからなかった。「二人のため世界はある」と歌っても、その世界が明日も続くという保証がないのに、なぜ無関心でいられるのだろうか？ 愛し合う二人こそ、明日を思って自然、と考えるのに、なぜ愛し合うだけで満足なのだろうか？ せつな的な幸福に酔いしれて幸せ、という風になぜなってしまうのだろうか？

その時代の平和運動は、社会主義思想と一体になっていた。日本型革新思想……戦争を経た日本の風土から生まれた平和思想とヨーロッパから輸入したマルクス主義思想との合体である。

私は父親がマルクス主義者だった。小さい頃からソ連は理想の国、といわれて育った。そのソ連が、核実験をして私たちの身体を侵すのは許しがたかったが、私は学生時代にスターリン主義批判の洗礼も受けた。反帝国主義、反スターリン主義。米ソのどちらにも組せず、真の社会主義社会の実現をめざす。

社会科学研究会というのがあって、私はそこの合宿に行った。そこで討論して、今は平和の問題が第一なんだから平和運動こそやるべきだと言ったら、マルクス主義者のTさんに反論された。

「今は平和の問題が第一だからと言ってすべての問題をごまかす、ぼくはそういうのに反対なんだ！」

私は、当時、二の句も告げられなかった。

が、今は思うのだ。平和の問題以外にどんな問題があったというのか。人間疎外？ 労働者の解放？ 当時はそんなことが言われていたが、観念論であった。社会は高度成長社会で、みな、繁栄を謳歌していた。

むしろ不景気に苦しむ現在こそ、労働者の解放が叫ばれていいわけなのだ。だが、マルクス主義は遠くに去ってしまった。

観念論で、戦争と平和を論じてはならない。私たちは、人殺しをしてはならないし、戦争はどんな言葉で飾ろうとも、大勢の人を殺すことだと知らなければならない。

自衛のため……が、いつのまにか、国際貢献とやりに替わっている。集団的自衛権というと、

アメリカの侵略戦争に参加することになる。ビン・ラーデンたちはニューヨークを襲ったが、イラクやアフガニスタンがアメリカを侵略したわけではない。これがなんで「自衛」の戦争なのだろう？

労働者の解放をうたった「反帝国主義・反スターリン主義」運動は、結局、平和のためにもならなかった。自分たちの組織を、反戦青年委員会などと名づけていたが、反戦とは縁もゆかりもなかった。

戦争とは大勢の人を殺すことである……この当たり前のことを知って、反戦平和の原点に立つ。このことこそ重要と思う。

そして、今は亡くなった大勢の人たちに守ってもらって、平和を享受してきた私たち、その過去の世代からきちんと学ばなければならない。

社会党は、国民の三分の一から支持されていたのに、今は見る影もない。戦争は嫌、平和こそ、という社会党流の絶対平和主義、これを今こそ復活させるべきではないか。

原点に帰って、反戦平和を。